

青少年義勇軍から軍隊へ

香川県 榎木 栄

私は香川県に生まれました。讃岐地方は気候温暖で生活は快適で恵まれた土地です。昔から、四国（四力国）四県で「讃岐の国、香川県。阿波の国、徳島県。土佐の国、高知県。伊予の国、愛媛県」です。中央に四国山脈（石鎚山、一，九八二メートル・西日本最高の山）を主峰に東へ延び、剣山などが地軸の大屏風を形成して、北部に位置する香川県を護ってくれているようです。

この讃岐山脈は小屏風で、その中間から走り、小川の流れを集めて「暴れ川」の異名をとる吉野川は四国三郎と人は言い、徳島を経て紀伊水道へ流れ入ります。香川はその言葉の名に反し水の恵みが悪く、太古より難渋していました。弘法大師様のお陰を得まして「満濃池」を作って頂いて以来、近世代まで、そのお恵みの有り難さに深く

感謝し、日々を生活しています。

近隣の人達も必ずしも生活は裕福ではないのですが、皆の心は穏やかで仲良く暮らしていました。「霊場八十八カ寺国分寺」が近くに在りました。

私の家族は両親の基に男兄弟五人、女姉妹四人で、九人の子宝一家の十一人家族でした。私は三男でした。

家は農業で生計を立てていました。耕作は自作四反歩と小作四反歩、自作の桃畑等四反歩で、農繁期は多忙でしたが、皆力を合わせて働いていました。裕福ではないがさりとて極貧でもなく、当時は世間並みの生活でした。そしてその日その日は楽しく笑顔で賑わっていました。

私は小学校から高等科まで卒業させて頂きました。ちょうどその頃、役場より「ただいま、満蒙開拓団の要員を募集している。青少年義勇軍に応募して見ませぬか」と言われ、私は三男だ「よし、一つ決心して体当たりしよう」と両親や兄に相談して、全員の了承を得ました。

そして町長さんの推薦状を頂戴し、申込み用紙に記載して応募しました。入所「許可」通知が来ました。関東の茨城県内原です。四国から一歩も外に出たことのない私です。初めての一大雄飛でした。希望七分と不安三分という気分でした。当

時は旅行者は特別業務か特別階層の人達ばかりでした。東京より、まだ遠い茨城の内原にある「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所」に入所しました。父親は心配そうな顔で帰って行きました。

俺も十五歳だ、昔の武士なら元服した齢だ「頑張るぞ」という気持ちでした。所長は加藤寛治でした。所内は部隊編成でした。各中隊、小隊、分隊と分れて軍隊同様の起居動作でした。日課も節度正しく、いつから始めて何を行う、とすべて規律正しく国策に順応し、大陸に適した農耕及び諸訓練でした。

同期生の友達は大部分が農家の次男か三、四男で、中には商工業関係の子弟もいました。全員が「協力、共存、協栄」そして協同作業の充実でし

た。とくに炊事当番や夜間の見回り不寝番なども、全員が身を持って体験しました。

しかし同期生の中にも、この訓練や教育等に同調出来ず、涙を流しながら離脱した者もいました。私は一心不乱に勉強しました。その甲斐あって、第一次検閲は無事終了しました。いよいよ満州へ出動の時が来ました。「行け、満蒙へ！ 若人よ」ということで張り切って勇躍出動しました。時に弱冠十六歳でした。

下関より関釜連絡船で日本を離れて朝鮮から満州へ行きました。どこを通ったか、どの線路を汽車が走ったか一切記憶に残っておりません。満州の大地に足を着けたところが勃利と言う所でした。ここには軍隊が多く駐屯していて、多くの軍人がいる街でした。それから少し離れた所は、一望千里という広い所に「青少年義勇軍大訓練所」の看板が一枚ありました。いよいよ到着したなという感慨がありました。

配属は第三中隊に決まりました。出迎えた隊長

が「諸君はただいまから当所の一員だ。現実の厳しさは充分理解出来るだろう。仲良く健康に注意してやってくれ」という訓辞でした。翌日からは毎日、農耕教育でした。土地は充分肥沃していました。変ったことは各小隊に三八式歩兵銃が数丁有り、一週間に五、六時間の軍事教練があつたことです。

古い昔話しに聞いていた明治維新の北海道開拓当時の屯田兵とは、自分達「義勇軍」のような状態だったのだろうか。銃剣術も良くやりました。現地では馬賊とか匪賊に対する警戒訓練だといっていました。が、関東軍の真意は対ソ連戦に対する第二次防衛軍団だったのでしようか。

一年間の訓練も無事終了しました。次は小訓練所に移動することで、三江省方正県・龍頭義勇軍小訓練所でした。前入所地より北方へ百キロ以上のところで、松花江が近くを流れていました。氣候風土にも一カ年の経験で馴れ、いろいろのことは一応の理解は出来得るようになりました。

ら「柂木、郷土民謡の金比羅さんをやれ」といわれて下手な歌ですが故郷を偲びながら歌いました。「こんぴら、船船、追っ手に帆かけて、シユラシユシユシユ、回れば四国は讃州なかの郡、象頭山、金比羅大権現、一度回って、こんぴら船船」と第二番に続きます。

自分も一応三カ年の任務期間を経て、昭和十六（一九四一）年八月十九歳で、林口において特別志願で徴兵検査を受け、甲種合格を申し渡されました。そして翌年の一月十日「歩兵第十二連隊へ入隊せよ」でした。三年間住み馴れ、親しんだ小訓練所に別れを告げ、先輩や後輩達に見送られ懐かしの讃岐の我が家へ帰りました。

一息ついた年末の昭和十六年十二月八日、例の大本営発表です。いよいよやった、大東亜戦争の火蓋が切られたのです。明けて昭和十七年一月十日に町民総出の入営見送りでした。当時は戦意高揚だといって、軍部からも通達が来ていて、自治体が先鞭を切って「出征軍人を激励せよ」でした。

自分は特別任務として倉庫係を命ぜられまして、農耕や牛、豚、養鶏等の畜産は免除されました。食料をはじめ諸物資の搬入と支給等々の取扱いで、肉体的には結構重労働でした。一番厳しかった仕事は、燃料（材木）の伐採、搬入等でした。冬期は石炭のみでなく、薪も使用したためです。それでも訓練、教練、小演習には参加しました。また農耕具の手入れ、農産物の貯蔵方法や春の植付けに対する心配りなど、裏方作業全般でした。楽しみは時々のお休日で、慰労会が集会所でありました。また国民行事の祝日、一月一日（元旦）、紀元節、二月十一日（現・建国記念日）、天長節（昭和天皇誕生日）、明治節（明治大帝誕生日）等の外にも祝事とかいつて休養日がありました。当日は赤飯が食膳に出され、その上に祝酒が各人に一合位出されました。自分達未青年者でも当日は「大目に見たる」で少し頂戴しました。

また娯楽余興として、現在の「のど自慢」のようなことや隠し芸などをやっていました。先輩か

そして丸亀の歩兵第十二連隊へ入営しました。

三カ月間の初年兵教育がありました。自分は十六歳の時よりの集団教育訓練を充分受けています。関係上、特別志願兵でも至極平易な取扱いでした。一期の検閲終了後、歩兵第九百三十六部隊へ転属命令が出ました。所在地は満州三江省の宝頭です。同年兵は全員が満州知らずの人達ですから全員が自分に満州のことをいろいろ尋ねるのです。全員に自分の三年間の体験を話し聞かせました。人に頼りにされることは大変嬉しいことですが「誇大し誇張せず真実を説明する」ことでした。

先づ三寒四温とシベリア嵐の厳寒、金属に皮膚を接しないこと、足元には注意でチョコチョコ歩きをするなどでした。時は四月でも、まだ北滿は寒波の襲来する時がありましたが、一番大きなのは関東軍特別大演習で、内地からもその演習要員として召集令状を受け取って満州へ来た兵隊が多数おりました。各部隊は増大した兵員収容のために兵舎の増築で大変でした。関東軍百万人といわれ、

これを「関特演」と言いました。

また師団や連隊の中、小規模演習、訓練、特に昼夜転倒の訓練は大変でした。朝「消灯ラッパ」、夕方に「起床ラッパ」です。一週間か十日ほどでしたが「昼夜転倒」は精神的に降参でした。

昭和十八年四月に虎林第四百十部隊へ大森少尉以下一個小隊全員に転属命令が発令されました。この部隊は師団司令部でした。要するに自分達の大森少隊長以下は司令部の警備、警戒要員だったのです。師団長閣下はじめ上級将校の外出時には特別警護でした。絶えず実弾を三八式騎兵銃、十九年式拳銃に装填して先導し、時には付近の警備でした。なお大森小隊は軽機関銃班が二個分隊と自分の分隊擲弾筒班の第三分隊でした。

なお前任地の第九百三十六部隊当時は、散兵戦では布陣配備で原野を走り回り、塹壕掘りや蛸壺で対戦車戦闘形式などで、いつも泥まみれになっていました。今は嘘のような生活になりました。ただ緊張はしましたが、精神的、肉体的には楽で

年間でした。

昭和二十年四月、転属命令が出ました。「いざ南方戦線か、いざ行かむ」と逼迫の気が一瞬流れました。列車は南下して朝鮮の釜山港から船舶の世話になり、投錨した所は門司港で、上陸となりました。一瞬気が抜け、反面やれやれとは偽らざる気持ちでした。そして次の命令は日本本土防衛でした。高知市の東方に在る朝倉の小学校の教室を一部接收して司令官以下の幹部室兼宿舍としました。

司令官、幹部は数日、海岸線方面を視察し、高知市の西方、介良林に本部を設置することとなり、ここに幕舎を張りました。自分達の護衛小隊も任務は半減しました。工兵隊が来て宿舍近くに大きな地下壕を作りました。自分達は散開して各分隊ごとにそれぞれ壕を掘りました。恐らく、この地で敵と決戦するようであれば「日本全滅だ」と決心する時です。

蛸壺壕も掘りました。そして警備小隊としての

した。余暇には銃剣術と駆け足を絶えず行いました。

司令部の建物は赤煉瓦の厚さが五十センチあり、二重窓で丸トーチカです。夏の寒暖にも快適に生活出来る立派な建物でした。過去幾年も満州で暮らしましたが、すべて半地下方式の建物や木造兵舎でした。厳寒時の暖房も壁ペチカや床オンドルが主でした。義勇軍当時は達磨ストーブでした。

司令部勤務は衛兵でした。二十四時間交代で衛兵司令一人（下士官）、衛舎係（上等兵以上）、歩哨係（上等兵以上）が各一人で、歩哨はそれぞれの担当場所に各三人の交代勤務です。場所は表門、裏門、望楼（高さ約十五メートル）、弾薬庫、将官閣下室前（諸官、見張れる所）以上五人の歩哨が三交代で十五人、司令以下喇叭手（伝令）を含め十九人。夜間の裏門は閉鎖されるので、この要員は動哨となり部隊周囲を巡回しました。そのため三日に一度は衛兵勤務でした。変ったこともなく至極のんびりと勤務していました。それも約二

任務も十分に務めていました。ただ漠然と作業も無く数カ月を経過しました。

七月頃になると米軍機が高々度で飛来し、銀色の胴体や銀翼を輝かしている心憎い光景でした。そしてそれが瞬時にして超低空飛行で爆弾投下を行い、戦闘機は機関砲や機関銃での掃射を行って去って行きます。地上からの応戦はなく、残念ながらも致し方ないことでした。このような空襲が何回かありまして、民間施設には被害があつたようです。

かくして八月十五日が来ました。「大森小隊全員集合」で近所の広場に集まりました。正午より重大ニュースがある。この前に広島（八月六日）と長崎（八月九日）に強力爆弾が投下されて、人間はもちろん、一木一草も無く焼き尽くされたとのニュースは入っていました。

ラジオを全員が不動の姿勢で聴いていました。天皇陛下の「玉音放送」でした。鮮明ではないが「終戦の詔勅」でした。内心敗戦かなとは思って

いましたが、現実となると愕然としました。残務整理を行い。武器一切を返納しました。

自宅へ帰ったのは、同じ四国にいたのに九月十二日でした。しかし村では早い復員で、早速お礼巡りをしました。礼場第八十六番礼所の「志度寺」、第八十七番の礼所「長尾寺」に帰還の報告と御礼を言上しました。金比羅宮は千三百段の石段を一気に駆け上がり、復員報告と御礼を申し上げました。私の家も長兄は南方戦線に従軍し、戦後PW生活をして二年後に復員しました。次兄は内地勤務の関係上逸早く復員しました。男三人が軍隊に行ったが無事に帰って来たことは両親にとっては最高の喜びだったと思います。

私も苦しいことも多々あったと思いますが、苦は忘れて、楽しいことのみが思い出にあります。お国のために身を投げうって働き、若き生命を捧げた方達の御冥福を祈り、二度と戦のなきことを念じています。

満州そして台湾防衛

佐賀県 石橋 正雄

私は、大正十四（一九二五）年二月十六日、佐賀県鹿島村で両親のもとに長男として出生しました。当時は祖母も健在で私を目に入れても痛くない。古い言葉にあります「我が子より出でて、我が子より可愛い」そのままに大変喜んで育てられました。その後、ふとしたことから母が病床に臥し、薬石の効なく不帰の旅に立ちました。家は農業で一町三反歩の田地と、畑が三反歩を耕地している状態でした。一応、世間的には中程度の生活でした。

母が亡きあと親類縁者が何や彼やと不都合、不便だろうと父親に再婚を勧めました。父も私のことを考えた末に再婚しました。その後、義母に弟と妹が出生しまして三人兄弟で仲良く、家庭内に笑い声の絶えること無き楽しい日々が続きました。